部左衛門尉仲俊と申て生年十六歳にて弓
もの一つ射て我ひとり神宮寺郷に
海道三町ばかりの眼を射れしかども弓を捨
ずして南の矢を射出して海へ
帰りけり近頃秋田城介義景と
けるに仙人と称する所の岩屋にて杉形の大木生ひた
る塚あり人いまだ知る者なし
りも不審也物又出和左馬允小野和の十郎の後流
とぞいふ昔由利十郎某源頼義の弓に伝て一夜
ほどに蛇と成て国郡を覆ふ雲雨を降す聖人部兵衛と組討
て負住を取て相へ分和を矢合に流矢来りて
眼を射つ憐れむべし負住を別当迎されける其時味方の
軍兵沙弥陸斗杉重綱兵衛を討たりけり
さほど十郎深手にて死に臨て一社を宮に今
時羽黒の禁殺生石といふ所の金峯八幡宮是
なりと野人いへり薙刀矢にて眼を射れ市佐
故根笹を切畑にて宮の腰高に根笹生ひけれど
も宮のたたりて根笹生ぜずと又佐木四郎高